

## 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成27年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	筑波大学	整理番号	C01
プログラム名称	ヒューマンバイオロジー学位プログラム		
プログラム責任者	伊藤 眞	プログラム コーディネーター	澁谷 彰
<p>1. 進捗状況概要</p> <p>(1) 全般的状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 最高学年が4年目となり、順調に事業が推進されている。</li> <li>・ 5年一貫制で、初年次終了時に研究室配属を行い2年次終了時までには60単位のコースワークを課しているが、現在博士研究に従事の高年次学生の研究成果もあがっている。</li> <li>・ 留学生比率が高く(約60%)、出身国もアジア諸国のみでなく、欧米諸国に広がり、コースワークをすべて英語で実施するなどグローバル性にも十分留意した教育が行われており特記すべき問題はない。</li> <li>・ 入学時にはアカデミック志向であった日本人学生・留学生がともに、入学後に、産業界や公的機関等への進出を意識しているのは教育の成果である。</li> </ul> <p>(2) 学生アンケート等から見る状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生アンケートおよび学生との意見交換により、多くの学生がプログラムを高く評価していた。しかし、一部、深刻な不満を抱く学生があり、教員側においても対応を図っているが、更なる努力が必要である。</li> <li>・ 初年次にプログラムの学生全員を独立の寮に入居させる方針で、学生相互の意思疎通、人脈形成が進んでいることが特筆される。特に、日本人学生がこの制度から受けている恩恵は大きく、留学生と一緒に生活する経験を通じて、視野の拡大、成長に大きく資している。</li> <li>・ 低年次のコースワークは学生にとっては負荷であるが、高年次学生はその意義を理解しており、その理解・経験が継承・共有されている。</li> </ul> <p>(3) プログラム終了後の計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本プログラムは、筑波大学の全学的な機構改革に基づく、独自の学位プログラムであり、博士課程教育リーディングプログラムの終了後も、入学定員は縮小するものの存続が確実となっているとの説明で、この点も高く評価できる。</li> </ul> <p>2. 意見(改善を要する点、実施した助言等)</p> <p>(1) コースワークについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 履修生の入学時のレベルは出身分野や出身国などにより一定ではないが、その点がコースワークの内容設定に十分配慮されていないとの不満があった。単なる単位認定ではなく、個々の学生の学習進捗の実測に基づき、コースの実施内容を多様化する配慮が望ましい。進捗の速い学生には、その確認を踏まえて、早期に研究への参加を認めることも一案である。</li> <li>・ 前項とも関わるが、60単位の内容をこれまでの実施状況に基づき精選し、出身分野別に生物学系の基礎的訓練を別立てにしてはどうか。</li> </ul>			

- ・ 本プログラムの枠組みとその内容は充実していると評価できるが、十分に理解・消化できていない学生に何らかの対応と細やかな支援が重要である。
- (2) 初期メンター、イニシエーションの充実について
- ・ 特に留学生の初期の学生生活・学習の支援にあたるメンターとして、教員によるメンタリングに加えて、高年次学生等によるジュニアメンターの設置が考えられる。折角の全寮生活を活かすことで指導が充実すると考えられる。また、研究室を超えたメンタリングは、指導教員によるプログラムへの関与の濃淡を補う上でも効果的と思われる。
- (3) 学生の支援について
- ・ 奨励金に関する、課税、社会保険の取り扱いなどについてのきめ細かい支援・指導が必要であるように見受けられる。とりわけ、留学生に対しては、我が国の税制度をふまえた事務・教務レベルの支援が必要である。
- (4) 研究レベルの確保について
- ・ 一部の学生からのアンケートの回答に不満があるように、大学院教育では、グローバルな競争の基礎となる高い研究レベルの確保が重要である。プログラムに参加する教員の研究レベルの全体の底上げについて留意し、メンバーの刷新を含む不断のプログラムの進化を図ることが必要と考えられる。
- (5) キャリアパスについて
- ・ リーディングプログラムは、研究者志向の学生に、広い視野をあたえ、産業界・国際機関を含む産官等への進出を促すが、そのような学生の受け皿の開拓も重要である。企業ラボ設置、インターンシップの重視などの施策に加え、キャリアパスの拡大を目指した積極的な活動が望まれる。
- (6) 制度設計の経験の維持・保存のために
- ・ 入学時には圧倒的にアカデミック志向であった学生が、教育によって徐々に視野を拡大する様子を、教育内容と定量的に関連づけるデータベースにまとめれば、今後の教育課程の改善の基礎となり、さらに、筑波大学のみならず、類似のプロジェクトや、政策立案等において有用な資料となるのではないか。